新熊本市史編纂だより

新熊本市史通史編　第9巻『現代Ⅱ』発刊

第26回新熊本市史編纂委員会から

市制施行百周年を記念して昭和63年から15か年事業として取り組んでいる新熊本市史。その運営方針を決定する平成12年度新熊本市史編纂委員会（委員長・永野光哉熊本日日新聞社会長）が7月11日、市内のホテルで開催され、平成11年度事業報告のあと、平成12年度事業計画を審議・決定しました。

委員会終了後、新熊本市史通史編第九巻「現代Ⅱ」の発刊報告会が開催され、永野委員長が三角保之熊本市長に発刊本を披露。三角市長から執筆者を代表して現代専門部会の真藤長生専門員（元熊日情報文化センター社長）にその功績をたたえ感謝状が贈呈されました。

新熊本市史編纂委員会の議事の要旨は、以下のとおり。

～平成11年度事業報告～

●刊行物

新熊本市史通史編第九巻「現代Ⅱ」、市史関係資料集第4集「肥後古記集覧」、研究論文集「市史研究第11号」ほかを刊行。

※通史編「現代Ⅱ」・・・平成8年度発刊の「現代Ⅰ」の続編。今回の発刊で新熊本市史は全21巻22冊のうち、15巻16冊が完成。詳細は12頁を参照。

※肥後古記集覧・・・大石真麿が文政4年～5年（1821～1822年）にかけて肥後に関する中世の軍記、系図、地誌等55種を書写編集したもので、全35巻。熊本県立図書館蔵本を底本として活字化したもの。

●史料収集

近世専門部会

尾藤家、生駒家、木村家、新町兵庫屋、吉村氏所蔵、城後氏所蔵、剱八幡宮（大分）、臼杵市立図書館所蔵文書ほか

近代専門部会

木村家、新町兵庫屋、永青文庫、九州大学所蔵佐々家文書、草津町営温泉資料館、高松宮記念ハンセン病資料館ほか

●史料購入

国学院大学附属図書館所蔵「梧陰文庫井上毅文書（マイクロフィルム）」ほか

※井上毅文書・・・熊本市出身で近代国家日本の骨組みである憲法と教育制度を立案・起草した同氏の諸法典編纂、議会制度、行政、自治、外交など広範囲にわたる文書を収録。

～平成12年度事業計画～

●刊行物

新熊本市史通史編第3巻「近世Ⅰ」、同第5巻「近代Ⅰ」、同第6巻「近代Ⅱ」、研究論文集「市史研究第12号」ほか

●史料収集

近世専門部会

小笠原家、三宅家、天理大学附属天理図書館所蔵橋村文書、永青文庫、県立図書館ほか

近代専門部会

熊本県酒造組合所蔵文書ほか

発行日
平成12年12月1日
編集・発行
新熊本市史編纂委員会
熊本市
（市史編纂室）
〒860-8601
熊本市手取本町1-1
☎328-2111

目次

新熊本市史「現代Ⅱ」発刊……1
～横井小楠没後130年記念～
幕末の思想家5人の立像完成……3
郷土研究をめぐる人々①……4
熊本地域における
水循環機構解明のこれまで……6
熊本城復元整備・日誌抄……8
市史トピックス……10
PRのページ……12

新熊本市史通史編「現代Ⅱ」刊行に寄せて

現代専門部会長　平野　敏也

平成12年3月、標記の本が刊行されました。本書は、既刊「現代Ⅰ」の続編であり、昭和47年から平成11年に至る熊本市の28年間の歩みを対象とし、第3編を「環境と福祉の登場」と題し昭和47年から60年を、第4編は「モノから心の時代へ」と題し昭和61年から平成11年までを記述する2編構成としています。

まず第3編は、昭和52年に熊本市が50万都市の仲間入りを果たし、地方の中枢管理都市として新たな段階を迎えた時期であります。市の予算の推移を見ますと都市基盤の整備、生活環境の充実などに積極的に予算投入がなされております。また、支所機能を持つ市民センターが各地に順次整備されたほか、産業文化会館、消防局庁舎、市民病院、さらには近代都市熊本のシンボルとしてふさわしい新市庁舎などの大型プロジェクトがこの時期相次いでなされました。

第8回新熊本市史発刊報告会から

これら高度成長期の谷間で起こってきたのがいわゆる環境と福祉の問題であります。

本市は、森の都とうたわれる大変緑豊かな都市であります。しかし、6・26水害あるいは急激な都市開発の影響で緑が失われようとしていました。そこで、昭和47年に森の都宣言がなされ、これに基づいて花畑公園の老楠の蘇生作戦が成功しました。これを契機として地下水など熊本の豊かな自然環境の保全へと市民の総意が結集してきました。

また、福祉にも関心が向けられ、具体的には、独り暮らしの老人訪問などの新事業が行われ、続いて児童館、母子福祉センターの建設、医療機関の充実などが図られました。

さらに教育の分野では、第2次総合計画基本構想の中に「風格ある文教都市の実現」が掲げられ、教育の近代化、環境整備のほか社会構造の急激な変化に対応するため生涯学習教育と公民館活動の活性化、文化施設の充実、さらには青少年の健全育成などが図られました。

続いて第4編では、平成元年の市制施行百周年を記念した事業、制度の実施、その後平成3年の旧飽託郡四町との合併、平成8年の中核市移行、中心市街地の再開発事業など九州の雄都として着実に発展を続ける様を述べています。

目を外に向けますと中国・桂林市、アメリカ・サンアントニオ市、ドイツ・ハイデルベルク市、郷土の先哲・横井小楠を縁とした福井市との友好・姉妹都市締結により幅広い都市間交流も進められています。

また、高齢化社会の進展に対応して「生き生きとした市民福祉都市」を都市像の一つに掲げます。そして市民一人ひとりが人間本来の豊かさを実感できる「ヒューマンシティ」の実現に取り組み、シルバー人材センターの設立、デイサービスセンター、在宅福祉センターの整備などに加え、市電には全国初の超低床電車を導入、市バス・民営バスにおいても低床バスが導入され福祉の充実が積極的に図られました。

スポーツの分野では、平成8年にアジア初の開催となる男子世界ハンドボール選手権大会、平成11年には、本市で2度目となる国民体育大会が開催され、これを契機として本市は、スポーツを通じて健康で生き生きとしたまちづくりを目指す「スポーツ都市宣言」を行うに至ります。これをもってこの巻の結びといたしました。

歴史を学ぶことは、故（ふる）きを温（たず）ね新しきを知る（温故知新）ことであります。

わたしたち熊本市民が、本市を発展させ、豊かなふるさととするために、本書、新熊本市史通史編第9巻「現代Ⅱ」がより良き糧となることを祈念いたします。

横井小楠没後一三〇年記念

幕末の思想家五人の立像が高橋公園に完成

除幕された「横井小楠と維新群像」

郷土くまもとが生んだ幕末の思想家・横井小楠ら明治維新の激動の時代を生きた5人の群像が、千葉城町の高橋公園に設置され、4月25日に完成式典が行われました。

これは、昨年の横井小楠没後一三〇年、生誕一九〇年を記念して㈶熊本国際コンベンション協会が企画したもので、㈶日本宝くじ協会の助成を受け、彫刻家の石原昌一熊本大学教授に制作を依頼していたものです。同氏は、日展の会員で交通センター前のおてもやん像や鞠智城跡のモニュメントをはじめ県内各地の優れた銅像やレリーフを手がけるなど彫刻家として第一線で活躍しています。

群像は幅7.2メートル、高さ5メートルのブロンズ製で、小楠を中心にその思想に大きな影響を受けたといわれる坂本龍馬、勝海舟、松平春嶽（福井藩主）、細川護久（明治維新後の熊本藩二代目藩知事）が並び、台座には徳富一敬や竹崎茶堂など小楠の弟子六人のレリーフもはめ込まれています。

制作にあたった石原教授は「この群像は文久三年（1863）頃に年代を設定しました。小楠が55歳、春嶽36歳、海舟41歳、龍馬29歳の頃で、盛んに情報交換を行っていた年です。中心になる小楠は、自説を説いている姿にし、傍らに耳を傾ける春嶽、護久がいる。一方には地球儀を挟んで未来世界を語る海舟と龍馬。龍馬は小楠を見つめる。台座中央には小楠の漢詩〝大義を四海に布かんのみ・・・・・〟を刻んだ。熊本城を背景に、小楠生誕の地に近い高橋公園に設置されるこの群像が、単に熊本の小楠だけでなくその思想を広く全国に、世界に発信する契機になって欲しい」。

除幕に臨んで三角保之熊本市長は「昨年は、小楠先生に関する講演会やシンポジウム等の企画が催され改めて見つめ直す機会を得ることができた。20世紀の終わりを迎えた今、ともすれば不透明感がただよう社会にあって小楠先生に学ぶべきは何か、〝実学〟の精神を正しく受け止め、21世紀を構築する施策に生かしていきたい。この群像が小楠先生の精神を今の時代によみがえらせる基地として、また熊本の新しい観光名所として皆さんに親しんでいただけものと確信している」とあいさつ。このほか除幕式には、小楠のひ孫で兵庫県芦屋市在住の横井和子さんや全国竜馬会会長の橋本邦健さんのほか熊本市の姉妹都市・福井市の奈良副市長も出席し完成を祝いました。

郷土研究をめぐる人々①

新熊本市史編纂委員会委員　鈴木　喬

熊本で郷土史研究熱の特に高まった時期が維新後に三回訪れている。最初は明治10年代、次は明治末から大正初期にかけて、第三回目は大正末期から昭和初期である。現在の昂揚は第四回目の波であり、戦後の町村合併に伴い旧来の市町村の消滅前にその記録を残しておきたいという意識に始まり、ついで合併市町村史編纂の動きがこれに続き、その動きは今日に及んでいる。

明治から大正初期までの研究者・発表者は、主として旧藩士の学者系統か師範学校教諭に限られていたが、大正末の郡制廃止に伴う郡史誌刊行の頃には、旧制高等・専門学校教授・旧制中学校教諭から小学校訓導まで活動の表面に現れてくる。大正12年に熊本歴史研究会が結成されて、毎月一回の実地踏査と公開講演会や研究授業を実施し、月刊の会誌「歴史研究」を刊行するようになると、その報道に携わる新聞記者の中にも研究者が出現してくる。私が当時の研究者と接触するようになるのはようやくそのころからのことである。

宇野東風（うの　はるかぜ　安政6・1859年～昭和13・1938年。現熊本市内坪井出身）という方がまず記憶にある。歌人で熊本陸軍士官学校の教官を勤め、大正四年から細川家史編纂所に入って藩史の研究に一生を費やした学者である。旧藩士で学校党系であるから、研究発表機関は当然九州日日新聞（以下「九日」）であった。随分沢山の郷土史関係のレポートを発表されたが、なかなか血気盛んで他の発表者の誤りを強く批判されるあまり、時には勇み足がありそこを突かれても決してあわてず騒がず巧みに反論あるいは修正された。「肥後藩国事資料」や「肥後文献叢書」等多くの共著や単独の著書で後進を裨益（ひえき）されたが、**山崎正董**（やまさき　まさただ　明治5・1872年～昭和25・1950年。現高知県高岡郡佐川町出身）前熊本医科大学学長との「九日」紙上での論争は強烈であった。山崎学長は土佐の出身であるが昭和七年退官後は専ら熊本の歴史の著述に没頭し、県内各地を巡遊すると必ず新聞に紀行文を発表された。例えば天草を紀行すると「天草紀行」の長文の連載が始まる。ところがその連載が終わると間髪を入れず東風氏の「天草紀行を読みて」という批判文の連載が始まる。これが十数回も続いて終わると今度は山崎氏の「天草紀行を読みてを読みて」という反駁（はんばく）長文の連載である。それが終わると「天草紀行を読みてを読みてを読みて」が再び宇野氏によって投稿される。果てしなく続く両者の論争に頭を抱える新聞社はついにここで「この連載はこの度をもって打ち切らせて頂きます」と白旗を掲げて両雄の面目を失わせることなく終了させる。

宇野　東風

こうした宇野・山崎論争は、この前後にも山崎氏の紀行のある度に何回も行われ、肥後のモッコスと土佐のイゴッソーが常に火花を散らした。宇野氏・山崎氏ともに当時の名士であり史家であったから、新聞社としても寄稿大歓迎の筆者ではあるし、その両者が筆鋒を交えるのは読者を引きつける絶好の材料ではあったが、新聞紙面は両先生論争のためだけのものではないので、ハラハラしながら掲載を続けていた。読者もまた山崎氏の寄稿がはじまると次には東風氏の反駁があることを期待して購読を続けるので、新聞社としては全く「痛し痒（かゆ）し」で両者の寄稿を待ったのである。当時「九日」は保守民政党の、「九州新聞」は革新

山崎　正董

政友会の政党機関誌であったから互いに負けずに読者獲得にしのぎを削っていたが、東風氏は保守系の「九日」への寄稿が多く、山崎氏は県外出身者であったため両紙に寄稿されていたが「九日」の方が断然多かったので、勢い両者の論戦は「九日」紙上で行われたのである。

山崎氏のイゴッソーは、もう一人の肥後モッコスとも対立して大変悩まれたことがある。それは昭和初期のことである。現在も上通にある古書籍店「叙文堂」の当時の主人河島豊太郎氏は、学者で文人でもあり、「肥後先哲偉績後編」の出版にも尽力した人であるが、ある日山崎氏は京都大学の狩野直喜氏を伴って河島書店の蔵書を見学に来訪した。その時、狩野氏はその中の一書を譲って欲しいと望み、山崎氏もそれを慫慂（すすめること）したが、河島氏はそれをお断りした。山崎氏はそれに立腹し、以後この店には一切来ないと断交を宣言した。普通の商売人ならここで辟易するところであるが河島豊太郎は先代又次郎以来の頑固者である。というのも先代又次郎は、すでに五高教授黒本植氏が「売らない本屋」として「肥後偉人伝」の中にも記しているくらいの有名人であった。その息子であるからそれぐらいではたじろがない。「そうですか。そんならおいでなはりますな」と応じ、喧嘩別れとなってしまった。しかしそのために貴重な史資料が河島書店に出ても入手できなくなった山崎氏は、今更和解を申し込むのは自分の面目が立たぬとやせ我慢を続けたが、それでも良い史料が出ていると欲しくてたまらず、時には人を介して購入されていたという。

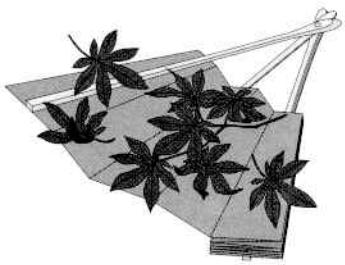
しかし、山崎氏は真面目で誠実な学者で「肥後医育史」という名著があり、熊本の史学者として重んじられていた。熊本出身の徳富蘇峰氏はこの人に横井小楠の伝記を書くことを奨めた。山崎氏がそれは先生が御適任でしょうと辞退すると「自分は身内でもありいくら公平に書いても兎角の批評を受けやすいので君に頼む」ということで、ついに引き受けることになった。昭和10年のことである。以来全国に史料を博採して、同12年にはその解読をしながら執筆を開始した。医学者であるから計画も綿密で日程もきっちり組んである。しかし当時の書簡は発信者と受信者の間にしかわからぬ隠語や比喩が多用されており、さすがの山崎氏もお手上げとなった。

当時山崎氏は、古新屋敷の通称白川御殿と呼ばれる屋敷に住んでいたが、幸いすぐ近くに第五高等学校の鈴木教授がいたので、急きょ訪問して解読を要請した。三通の長文の書簡を三日間でと日限をきられた鈴木教授も驚いたが、その熱意に打たれて三日で調査を終え、山崎邸を訪れると、山崎氏は下座に書記役の夫人を座らせ、正座して解読の成果に耳を傾け、その後実に二時間余りを質疑に費やした。こうした苦労の末に「横井小楠」上・下二巻は、昭和13年5月に完成したのである。

宇野氏と同時に細川家史編纂所にお勤めの史家に**中野嘉太郎**氏

中野　嘉太郎

（なかの　かたろう　慶応元・1865年～昭和17・1942年。現熊本市花園出身）がいる。「加藤清正伝」は同氏が明治42年、旧制豊津中等学校教諭の時代に、加藤清正三百年祭に際して刊行されたものである。中野氏は「大日本史料」編纂の体に倣って極めて斬新な学問的伝記を著し、江湖の喝采を浴びている。昭和初期には細川家で「肥後藩国事資料」の編纂に寧日なき有様であった。北岡別邸に詰めておられたが温厚な方で、穏やかな物腰で人に接せられ、年若だからとして見下されるようなことは決してなかった。かつて私が御所蔵の「細倉記」を貸して頂いた時も、細川家にとって名誉な事件ではないので発表は慎重にしていただきたいと特に申し添えられたことが今でも心に残っている。



（次号に続く）

熊本地域における水循環機構解明のこれまで

新熊本市史編纂委員会委員　下津　昌司

はじめに

人間社会は、その時代の欲求に応じて自然の水循環を改変しながら、社会の仕組みを展開させてきた。特に第2次大戦後の日本では、急速な経済活動の進展に伴い、大都市周辺をはじめ、全国各地における都市化現象に代表される流域における土地利用形態の変化、さらに水利用形態の変化が起こった。この変化がもたらした水循環過程への影響は、環境の悪化を招き、次には、自然生態系の破壊を通して、地域社会の存続をも揺るがしかねない要因ともなっている場合がある。

このような時代的状況を反映して、熊本地域でも豊かな水量を誇っていた江津湖、水前寺、八景水谷などの湧水も、地下水位が低下する梅雨前の時期には往時の面影を失っている。

阿蘇火山に由来する豊富な地下水に恵まれているはずの熊本都市圏域における水循環系の実態が、時代的経過の中でどのように解明されてきたのか、その概要をたどってみる。

今、水循環系を変える簡単な例は、人為的な方法で地中から地下水を汲み上げ、これをそのまま川へ流してしまう場合である。本来の地下水は、地表を流れる河川水に比べると、その流動速度は極めて遅く、地表水は一日に数キロメートル、出水時には数百キロメートル流下するのに対し、せいぜい数メートル、早いもので数十メートルから百メートル前後くらいである。つまり循環速度の比は最大10^5倍程度であり、地下水の循環速度は年単位で考えられるのに対し、地表水は日或いは時間単位で考えることになる。この循環速度の違いから地下水は貯留と表現され（流動速度が遅いだけであるが）、地表の数十倍の量が存在するように見られる。この地下水の速度を揚水によって加速させることは、自然の諸側面に多くの影響を与えることを認識した上で、ブレーキのかけ方に注意を払うことが必要である。

水循環系究明に関わる調査研究

これまでの経緯を年代順にまとめてみる。

○昭和10年代

内務省（現建設省）菊地川工事事務所による合志川河川流量調査により、流域水収支の不均衡が指摘される。

○昭和20～30年代

農林省による阿蘇外輪山西麓台地の開拓事業に伴う地下水開発のための地質ボーリング調査が実施されその地質構造から地下水の賦存・流動に関する新知見が得られた（図1参照）。

○昭和44年

熊大藤芳教授が、菊地川支川、合志川流域の水収支検討を基に白川流域への地下水流動の存在を示唆した。

○昭和47年

農林水産省籾倉克幹氏らは、これまでのボーリング調査結果に基づいて、菊地川流域から緑川流域にわたる地下水帯水層基盤岩分布を提示し、これが現在まで当地域の地下水流動の全体像となっている。

○昭和48年

熊本県企画開発部は、水資源開発の立場から、山本荘毅東教大教授の研究グループに外輪山西麓域の地下水調査を依頼。

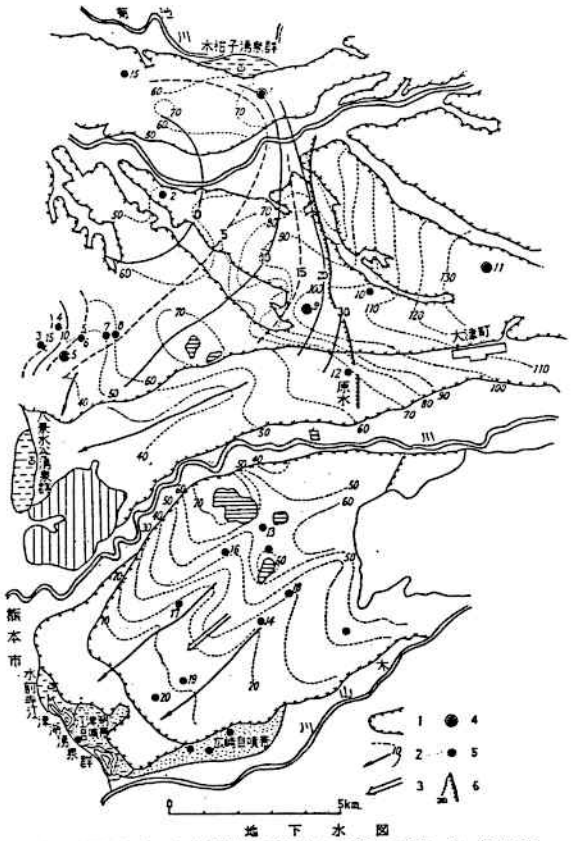


図1　地下水位等高線図（宮本昇氏らによる　1963年）

○昭和51～54年
　山本教授をキャップとし、科学技術庁、建設、農林、通産省の行政・研究機関による合同調査（地下水主体の水循環機構）「地下水の水収支の解析手法に関する総合研究」が実施された。
○昭和59～60年
　熊本県・熊本市は地域の地下水資源確保と水環境保全の立場から、前記の水循環系研究成果を基礎にして解析精度の向上と地下水収支の経年変化を把握し、公表した。
○平成5～6年
　前記報告以降の地下水収支の変化と解析精度の向上を図る調査が行われた（図2参照）。
○平成8年
　熊本県・熊本市は、これまでの調査を基に「熊本地域地下水総合保全管理計画」を策定し公表した。

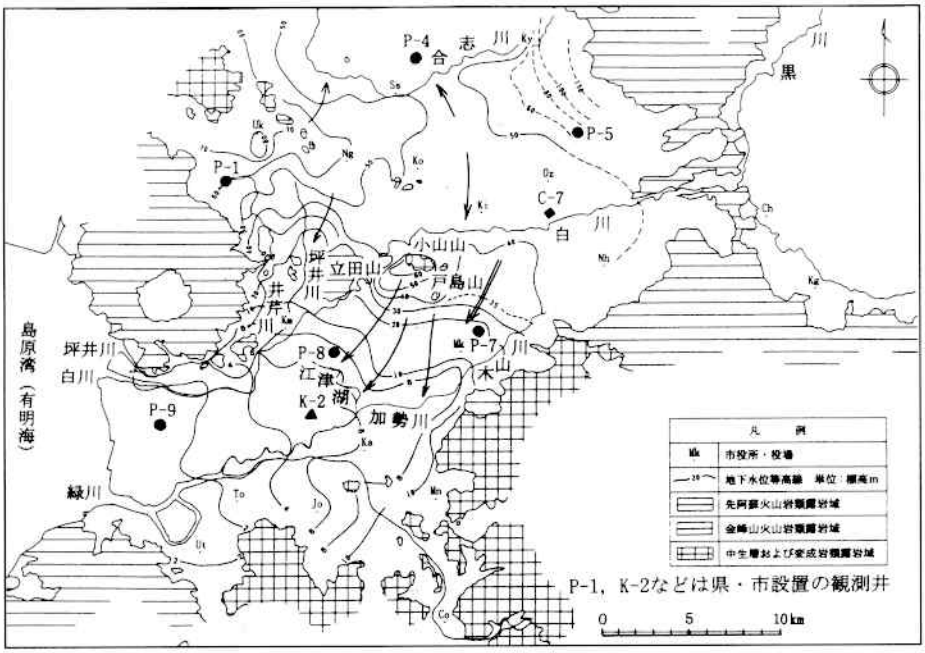


図2　地下水位等高線図～熊本地域地下水総合調査報告書（1995年）～

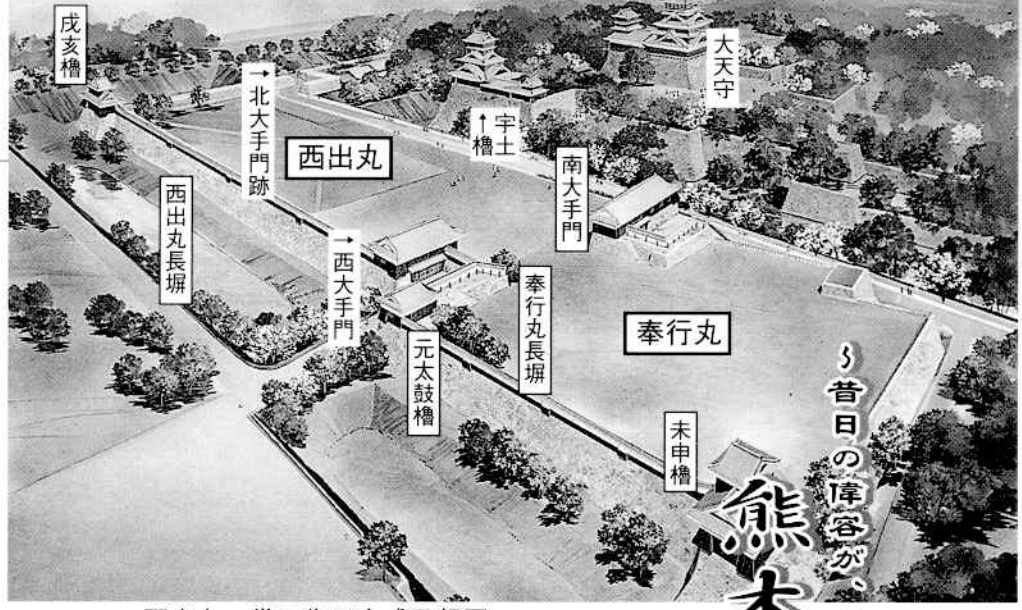
◇　◇　◇　◇

　このようにこれまでの70余年にわたる経過から見ると、敗戦後の食糧確保のため、火山台地における農地開発が端緒となり、新しい開田に伴う地下水取水が始まるとともに、30年代から40年代にかけての高度成長期の工業を含む都市用水の増加と相まって40年代の中頃から地下水収支に対する不安が芽生えてきて、44年の市水道局、48年の県企画開発部による調査につながったと言える。特にこれに続く「地下水の水収支の解析手法に関する総合研究」は河川水も含めて広域的水循環の視点から地下水をとらえようとする実利的色彩が強いものであるが、先駆的な研究であった。この後は、観測資料を蓄積しながら、主に地下水収支の将来予測を継続しているところである。そこで、前述の地下水総合保全管理計画書によれば、平成2年（1990）時点における地下水収支は、年間マイナス1、300万立方㍍となっている。2、000年の予測値として地下水涵養量は、年間500万立方㍍の減、一方、地下水の採取量の実績値は未把握であるが、ほぼ横這いとすれば年間2、000万から3、000万立方㍍のマイナスとなり、これまでの地下水貯水量の食いつぶしの進行が継続中である。

水循環の現況から今後を考える

　これからの地域の持続可能な生き残りのためには、健全な水循環系の構築が基本である。つまり、安全で快適な生活と、健全な生産活動を継続するとともに、環境の保全を図っていくために欠かせない条件である。当地は、多量の降雨により、豊かな表流水に恵まれるとともに、阿蘇火山の自然的恩恵の一つである地下水の湧水が、むしろ水源の主役である。その現実故にこれまで地下水主体の調査研究であった。そして当地では、この地下水がベースであることを要求し続けるであろう。
　しかし、これまでの経過から見て、地下水のみを対象にした考えでは、展望は開けない。
　つまり、水循環系の枠組みの中で、地表水との関係も含めた総合的な視点に基づくことが基本であると考える。さらに大きな枠組みを考えるなら、地球環境スケールの気候変動に伴う降水変動を視野に入れる必要性について、国際機関（IPCC）をはじめ、日本の気象庁も長期的な視点での警告を発している。大規模な現象としてアジア大陸における大干ばつ（パキスタン、中国）と大洪水の同居。また、ローカルスケールの例として、減反に伴う白川中流域水田からの浸透水量の減少により、江津湖湧水量の減に代表される地下水涵養量減少の事実。一方では、竜門ダムからの灌漑用水供給の開始に伴う菊池川木柑子湧水（図1参照）の水量増加の兆しといった水循環機構への人為的影響。このように水循環に対して、マクロとその中でのミクロ、また、自然とその中での人為的影響といった複眼的視点が必要といえる。

〜昔日の偉容が、今蘇る〜 熊本城復元整備



西出丸一帯の復元完成予想図

難攻不落の城として有名な熊本城は、名将加藤清正公が慶長6年（一六〇一）から7年の歳月をかけて築城したといわれ、武者返しと呼ばれる美しい曲線の石垣など大阪城、名古屋城と並び日本三名城の一つに数えられています。

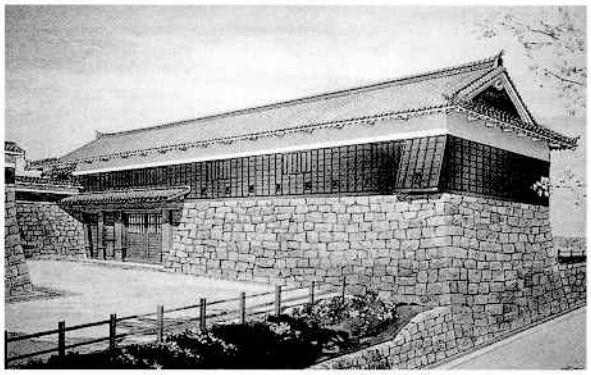
築城当時は、100ha（現在は98ha）にも及び、大小二つの天守閣を始め、櫓49、櫓門18、城門29を備えた様は、まさに豪壮雄大であったといわれています。

現在熊本市では、熊本の観光名所としてはもちろんのこと、熊本のシンボルとして、わたしたち熊本市民の心の拠り所となっている熊本城をまさに往時の雄姿に蘇らせるべく本格的な復元整備を市民総参加で進めています。

熊本城全体の復元整備は、壮大な事業になります。そこで熊本市では計画を短期・中期・長期に分けて進めることとし、短期的には、築城四〇〇年にあたる平成19年（二〇〇七）をめどに、本丸御殿大広間を始め二ノ丸から天守閣までの登城ルートの建造物の復元を予定しています。

その第一段として昨年7月から南大手門の工事を皮切りに西出丸一帯の建造物（未申櫓、戌亥櫓、元太鼓櫓、西出丸の長塀など）にも着手し平成15年度の完成に向け工事を進めています。

復元工事は、江戸時代の絵図や明治時代に撮影された写真などを参考にして、往時の工法（木材に切り込みを入れて組み合わせる継ぎ手工法など）、構造、既存建造物と同等の材料を使用するなど史実に忠実に復元を行っています。



南大手門の復元完成予想図

今後は、飯田丸五階櫓（平成12年度〜16年度）、本丸御殿大広間（平成15年度〜19年度）などの復元を順次進めることとなっています。

また、平成10年4月に設立された熊本城復元整備基金への寄附も

日誌抄

平成11年7月〜平成12年9月

平成11年

7・7　近世史料調査（宇土市市史編纂室、新町兵庫屋）

7・8　近世史料調査（山口氏所蔵文書）

7・10　第54回近世専門部会

7・19　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）

7・21　近世史料調査（後藤是山記念館）

7・22　第63回近代専門部会（通史編執筆要領の取り決め）

7・27〜28　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）

8・8　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）

8・20　第62回部会長会議（部会の進捗状況、市史関係資料集について）

8・25　近世史料調査（普賢寺・准如上人御書）

8・30　近世史料調査（普賢寺）

8・31〜9・3　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）

9・9〜10　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）

9・11　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）

9・21　第58回現代専門部会（通史編「現代Ⅱ」の執筆状況及び校正）

9・27　近世・近代史料調査（新町兵庫屋）

10・1　第64回近代専門部会（通史編「近代Ⅰ・Ⅱ」の執筆状況）

10・9　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）

10・26〜30　第25回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会出席（新潟市）

10・30　第55回近世専門部会

11・4〜5　新熊本市史編纂委員会視察研修（臼杵市）

11・8　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）

11・9　第59回現代専門部会

11・13　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）

11・16　第63回部会長会議、近世史料調査

3億円を突破（平成12年8月）するなど、まさに市民の夢を実現する市民総参加による取り組みとなっています。

※本丸御殿大広間・・・天守閣南東に位置し、天守閣に至る通路・闇御門（くらがりごもん）の上に建てられ、加藤清正が豊臣秀頼を迎えるためにつくられたといわれる「昭君の間」など53室1、570畳を備えた書院造りの御殿。

※南大手門・・・本丸西側の西出丸にあった熊本城最大の櫓門。木造二階建てのかわらぶきで長さ33・5㍍、高さ12・8㍍、幅7・8㍍、延べ床面積331平方㍍。

※西出丸長塀・・・西大手門と戌亥櫓を結ぶ総延長160㍍の土塀。

熊本城復元募金にご協力を

熊本市では、復元整備を進めるため、多くの皆様からの寄附を募っています。募金の方法は、市内の金融機関、郵便局をはじめ、総合支所、市民センターなどに備えてある振込用紙によるもののほか、募金箱も設置しています。また、市役所では、直接寄附申込みもできます。

寄附をされた方全員のお名前を「永代帳」に記載し、城内で公開するほか、1万円以上の寄附をされた方を「城主」とさせていただき、「城主証」をお渡しするとともにお名前を「城主芳名板」に記載し天守閣に掲示しています。

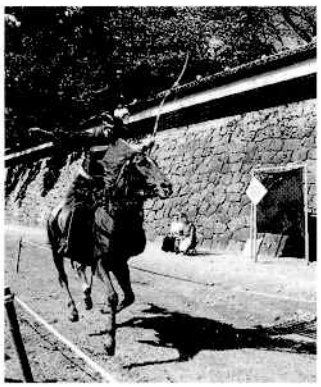
皆さんの温かいご支援をお待ちしています。

（問）熊本城総合事務所整備振興課
TEL359・6475

第5回くまもとお城まつり

熊本城の魅力に酔いしれた16日間

くまもとの秋を彩る恒例のくまもとお城まつりが熊本城竹の丸をメーン会場として10月21日に開幕。開幕を告げる夢の架け橋コンサートでは、天守閣をバックに歌手の岩崎宏美さん、松崎しげるさん、小柳ルミ子さんらがヒット曲を熱唱し会場を沸かせました。27日の夜には「熊本城薪能」があり、かがり火の中、石垣を背に繰り広げられる幽玄の世界を、11月3日には長塀前で武田流騎射流鏑馬（やぶさめ）の演舞があり、見事な手綱さばきと弓さばきを披露。最終日となった11月5日には、築城400年の歴史をたどる「時代行列」の総勢471人が上通から下通、新市街を経てメーン会場の竹の丸までを練り歩きフィナーレを華やかに飾るなど連日の催しに多くの市民が訪れ、熊本城の魅力を再発見する機会となりました。



（熊本大学附属図書館・永青文庫）
12・3　第25回新熊本市史編纂委員会
12・7　現代史料調査
12・11　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）
12　17　第65回近代専門部会
12・20　第64回現代専門部会長会議
12・23～27　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）

平成12年
1・9　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の項目検討）
1・31～2・3　近代史料調査（草津町立図書館、栗生楽泉園、高松宮記念ハンセン病資料館）
2・2　近世史料調査（旧細川刑部邸史料撮影・年中行事図解）
2・3　近世史料調査（熊本博物館・久野家伝来文書、井手文書、城文書）
2・12　近代史料調査（通史編「近代Ⅰ」の執筆状況について）
2・13　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）
2・15　近世史料調査（山鹿市・内田家文書、藤崎宮神護寺文書）
2・16　熊本市史関係資料集「肥後古記集覧」編集会議
2・17～21　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）
3・11　第57回近世専門部会
3・13　第66回近代専門部会
3・16　第65回部会長会議
3・17　第61回現代専門部会
3・21　熊本市史関係資料集「肥後古記集覧」編集会議
4・4　近世史料調査（小笠原家文書）
4・5　近世史料調査（新屋敷・三宅家文書）
4・15　第58回近世専門部会（平成11年度事業報告・平成12年度事業計画）
4・18　近世史料調査（新屋敷・三宅家文書）
4・19～20　近世史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫）
4・22　第67回近代専門部会（平成11年度事業報告・平成12年度事業計画）
5・13　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）
5・18　第68回近代専門部会（通史編「近

市史トピックス

小笠原家文書を収集

平成12年3月、小笠原備前家伝来の文書を所蔵する方がおられるとの情報に、市史編纂委員会近世部会からの要望もあって、さっそく調査の申し入れを行った。

小笠原家といえば、中世以降の武家の故実礼法を伝え、室町幕府の儀礼を扱った家柄である。

その分流である小笠原少斎秀清は細川藤孝・忠興に仕え、慶長5年（一六〇〇）の関ヶ原の戦い直前の7月15日に石田三成に攻められ、大坂玉造の細川家屋敷で細川ガラシャを介錯後、殉死した人物である。その息子玄也はキリシタン禁令の中、寛永12年（一六三五）家族とともに熊本禅定院で殉教したことで知られている。

また、近世期を通じて熊本で六千石の高禄を受けており、どのような史料が伝わっているのか期待が膨らんだ。

調査には、市史編纂委員会近世専門部会専門員と現地村役場村史編纂担当者が同席し、史料が一点ずつ所蔵者立ち会いのもと慎重に広げられ、目録が作成された。

今回確認された史料は、総点数310点。その内容は、まず小笠原家の系図や当主の肖像画。細川忠興より少斎の息子加賀美又六への慶長6年10月の知行宛行状を始めとする代々の御書出。同家の家臣帳や主従関係を伝える文書。後代の小笠原長知・長衡・長栄・長頭関係の書状や、家族間で取り交わされた多数の書簡。上級武士の生活状況を伝える諸史料。そして小笠原家ならではの、武芸故実に関わる中世以来の相伝書・口伝書や武芸目録・軍事書の類である。また、戦国期、細川家の動きを中心に描かれた小牧合戦図や岐阜合戦図も確認された。

小笠原家の文書は、藩主細川家の側近としてだけでなく、幅広い観点から武家を知るために興味深い史料であり、熊本における数少ない上級武家の史料である。新熊本市史の編纂はもとより、今後の歴史研究に必要な史料を収集できた意義は大きい。そして現在の所蔵者の祖先は、近世期は小笠原家の家臣で、その関係で史料を受け継ぎ、大切に持ち伝えているとの説明は感慨深いものであった。

これらの史料は写真およびマイ

5・30　代Ⅰ・Ⅱ」の執筆状況について）
第66回部会長会議（平成11年度事業報告、平成12年度事業計画案、別編「年表・索引」について）
6・5～8　近世史料調査（天理大学附属天理図書館・橋村肥前大夫文書）
6・10　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ、史料調査報告）
6・23　近代史料調査（通史編「近代Ⅰ」の執筆状況について）
7・11　第26回新熊本市史編纂委員会（平成11年度事業計画、平成12年度事業計画）
通史編第9巻「現代Ⅱ」発刊報告会
7・17～19　新熊本市史編纂委員会視察研修（会津若松市）
7・21　近代史料調査（通史編「近代Ⅰ」の執筆状況、印刷スケジュールについて）
7・22　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ）
7・25　近世史料調査（新屋敷・三宅家文書）
7・26　近世史料調査（熊本大学附属図書館・松井文庫）
8・7　別編「年表・索引」編集会議（年表の構成について）
8・8～10　近代史料調査（国立公文書館・国会図書館憲政資料室）
8・12　近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」の内容打ち合わせ、印刷スケジュールについて）
8・29　近代史料調査（通史編「近代Ⅰ」の内容調整）
9・5　第67回部会長会議（平成12年度刊行計画及び別編「年表・索引」について）
9・6　近代史料調査（黒髪・伊東氏所蔵文書）
9・7　近代史料調査（黒髪・池田氏所蔵文書）
9・9　第59回近世専門部会（通史編「近世Ⅰ」の巻末年表、掲載写真について）
9・18　近代史料調査（黒髪・伊東氏所蔵文書）
9・22　近代史料調査（通史編「近代Ⅰ」の内容調整、市史関係資料集について）
9・28　近代史料調査（黒髪・池田氏所蔵文書）

クロフィルムに撮影して、市史編纂室に複写史料保管の許可をいただいた。

調査にあたってご助力をいただいた熊本県立図書館、現地村役場の方々、そして所蔵者のご理解ご厚意に深く感謝申し上げる。

熊本県酒造組合所蔵文書について

瑞鷹酒造の吉村圭四郎氏より、県酒造組合所蔵資料の情報提供があったのは平成12年3月のことであった。同氏は歴史に造詣が深く同組合の資料が熊本の酒造の歴史を知る上で重要であることを認識されてのことであった。

資料は、県酒造組合の倉庫に保管されており、大正から現在までの資料がほぼ完全に保存されていた。酒造組合の事務所が米屋町にできた当初から紺屋町、塩屋町、南千反畑町、島崎町、桜町と移転し、現在の城東町に至るまでのものである。何回もの移転にも関わらずこれだけの資料が散逸することなく保存されてきたのは、管理者の見識とともに驚嘆に値することである。

内容は、酒造組合の財政に関するもの、加盟業者やその醸造量、博覧会・品評会の書類、全国的な団体との関係、行政とのやりとりなど多様である。また、恐慌時の酒造税融資関係書類や転廃業者の資産処分の書類、戦後GHQの命令によって熊本の酒造組織を整理、閉鎖する際の書類なども含まれており、熊本における酒造史の研究に貴重な資料が数多く見られる。

今回市史編纂室では、明治から昭和20年までの資料を借用し、目録を作成、必要部分の撮影を行った。

資料は、帳簿、証憑・領収証、賦課金台帳、酒造税融資関係書類、職員給与関係、往復文書、九州連合会関係、品評会・博覧会、統制関係、出版物、雑の項目に分けて整理した。借用したものだけでも延べ400点、収集したのは、マイクロフィルムにして約40、000コマに及ぶ。

目録づくりに1か月。撮影準備のための間紙入れに1か月、撮影に1か月の計3か月の期間を要した。

熊本市には、産業関係のまとまった資料はなく、新聞や行政資料、企業の記念誌などに頼らざるを得ない状況にある。

今回収集した資料は、熊本における酒造の歴史のみならず、熊本の経済を解明する上で貴重な資料になると思われる。

一般的に歴史資料というと、和紙に墨で書かれた古文書を連想することが多い。しかし近代においては、印刷物や行政からの文書等も当時の歴史を語る重要な資料である。近代の資料は、その意味では資料と認識されないまま失われる可能性が大きい。今後酒造組合資料のように、埋もれた資料が発掘されることを期待する。

快く資料を提供していただいた熊本県酒造組合に感謝申し上げる。

新熊本市史編纂委員会委員の田邊哲夫先生が、去る10月9日逝去されました。

戦後の県内における考古学のけん引役として活躍され、新熊本市史では通史編「自然・原始・古代」等でご執筆いただきました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

史料調査にご協力いただいた方々

（平成11年7月～平成12年9月）

山口為雄（坪井）、渡辺節子（新町）、吉村圭四郎（川尻）、内田英雄（山鹿市）、田端尚子（楠）、三宅洋介（新屋敷）、土山洸（滋賀県）、伊東俊治（黒髪）、池田康起（黒髪）、安田節爾（東京塚）、木村秀雄・小出隆（田迎）

国立公文書館、国立国会図書館、防衛庁人事局、東京大学史料編纂所、国文学研究資料館、熊本大学附属図書館、天理大学附属天理図書館、熊本県立大学、熊本県立図書館、会津若松市、草津町立図書館、永青文庫、普賢寺、栗生楽泉園、高松宮記念ハンセン資料館、熊本県酒造組合、熊本日日新聞情報文化センター、コロニー印刷、九州航空、熊本市PTA協議会、江津湖の自然を守る会、熊本博物館、旧細川刑部邸、後藤是山記念館

（敬称略、順不同）

熊本の軌跡がここにある。

新熊本市史 通史編 第9巻「現代Ⅱ」発刊

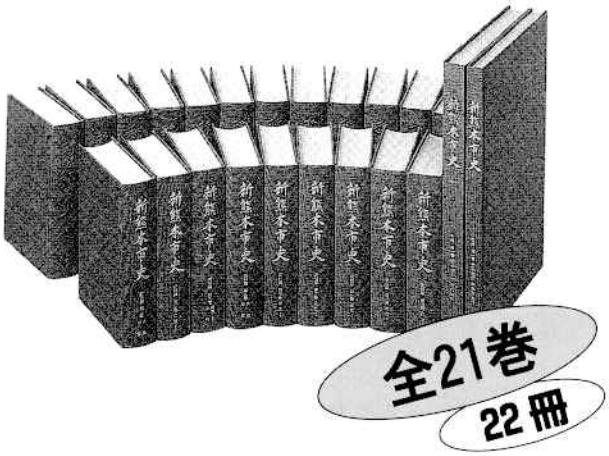
●通史編「現代Ⅰ」の続巻にあたり、昭和47年から平成11年までを収録。「環境と福祉の登場」「モノから心の時代へ」の二編で構成

●環境・福祉への関心の高まりとともに国際化・情報化など新たな時代の局面を迎え、市制施行百周年・旧飽託郡四町合併・中核市移行を経て、拡大発展を続ける熊本市の姿を様々な視点から記述

A5判　本文　一、〇六八頁
頒布価格　四、三〇〇円

市内主要書店で
好評発売中！

新熊本市史刊行のお知らせ



わたしたちの郷土・くまもとの歴史がわかる「新熊本市史」を市内主要書店でお買い求めください。書店にない場合など詳しくは、市史編纂室（☎328－2038）へお問い合わせください。

既刊	通史編	第1巻	自然・原始・古代	5,000 円
		第2巻	中世	4,300
		第8巻	現代Ⅰ	4,300
		第9巻	現代Ⅱ	4,300
	史料編	第1巻	考古資料	5,700
		第2巻	古代・中世	3,700
		第3巻	近世Ⅰ	3,700
		第4巻	近世Ⅱ	4,800
		第5巻	近世Ⅲ	4,800
		第6巻	近代Ⅰ	4,800
		第7巻	近代Ⅱ	4,800
		第8巻	現代	3,700
		第9巻	新聞 上 近代	3,700
		第9巻	新聞 下 現代	3,700
	別編	第1巻	絵図・地図	10,300
		第2巻	民俗・文化財	5,300
発刊予定	通史編	第3巻	近世Ⅰ	平成12年度
		第4巻	近世Ⅱ	平成14年度
		第5巻	近代Ⅰ	平成12年度
		第6巻	近代Ⅱ	平成12年度
		第7巻	近代Ⅲ	平成14年度
	別編	第3巻	年表・索引	平成14年度